



## 春近し、なのかな？

雨雪の重さにへこたれそうになりながらも、市立図書館の職員は除排雪に頑張っています。増築工事も順調に進んでいるようで、いよいよ内装にかかってきました。4月のオープンまで、なんとか倒れずに走り抜きたいと願う今日この頃です。

### ❖音楽の社会学

学生時代に、ベートーヴェンの5番と6番の交響曲、つまり「運命」「田園」として知られる曲の初演コンサートのプログラムを知って驚いたことがあります。列記してみます（作曲はすべてベートーヴェン）。

- ・交響曲へ長調（田園）
- ・アリア
- ・『ミサ曲ハ長調』より「グロリア」
- ・ピアノ協奏曲第4番
- ・（休憩）
- ・交響曲ハ短調（運命）
- ・『ミサ曲ハ長調』より「サンクトゥスとベネディクトゥス」
- ・合唱幻想曲

現代のクラシックコンサートでは考えられない配列と、何より4時間以上もかかるという盛りだくさんすぎる内容。現代の典型的な配列は序曲 - 協奏曲 - （休憩） - 交響曲というものですから、今なら優に2回分のボリューム。時は1808年12月、ウィーンの暖房もない劇場で聴衆も少なく、準備不足もあって演奏は惨憺たるもので、完全な失敗に終わりました。

当時のヨーロッパの音楽は何といってもオペラが人気。器楽だけの音楽は、名人や神童は別として、それだけで客を呼べるものではありませんでした。オーケストラの器楽コンサートは人気歌手をメインに据えて、新作の交響曲は幕開けの耳慣らしに聴いてもらうものでした。それが19世紀半ば以降に交響曲優位になっていくわけです。

いやはや、こんなことを説明していたらいつまで経っても終わりませんね。以上のようなクラシックコンサートの歴史的変化を豊富な資料を駆使して描くのが、宮本直美著『コンサートという文化装置―交響曲とオペラのヨーロッパ近代』（岩波書店、2016年、中央図書館蔵）。東京芸大の修士課程で音楽学を、東大博士課程で社会学を学び、現在は立命館大学教授という著者の専門は音楽社会学と文化社会学。クラシック音楽の社会学的考察という視点が珍しく、とても興味深く読めました。

なお、この本を県内図書館の横断検索で調べたところ、大館市立中央図書館以外には秋田県立図書館と秋田大学、国際教養大学の所蔵が確認できました。秋田市内に3冊、大館市に1冊というわけです。音楽および社会学に興味のある方はぜひ。

#### ❖購入点数と出版点数

大館市立中央図書館で平成27年度に増加した図書と紙芝居、つまり購入したものと寄贈されたものの合計数は2856冊でした。いばれる数字ではありませんが、これでも以前よりは増えています。それはともかく、この数字から絵本を含む児童図書や、紙芝居、郷土資料の合計904冊を除いた1952冊の内、どの類目が多いかという、大方の推察どおり9類の文学でダントツの745冊でした。

かなり前に当コラムで分類の説明はしていますが、日本十進分類法によるもっとも大きい分類である類目を再度示しておきます。館内の本の並び順でもあります。

0 総記 1 哲学 2 歴史 3 社会科学 4 自然科学 5 技術 6 産業 7 芸術  
8 言語 9 文学

それでは、1年間に出版された図書で一番多かったのは何類でしょうか？これも当然文学だろうと思いますよね。ところが、これが違うんです。

平成26年の新刊書籍出版点数は、総務省統計局のHPで出版ニュース社の『出版年鑑』のデータを見ることができます。それによると、26年の総出版点数80954冊中、1位は社会科学の15858点でこの10年ずっと1位です。2位は13484点の文学、僅差の3位は13063点の芸術という順番で、1万点を超えるのはこの3つです。

意外に思われた方も多いと思いますが、分類上の社会科学には社会学の他に、政治学、経済学、法学、社会心理学、教育学、民俗学・民族学、国防・軍事まで含まれるので、まあそうかなとも思えます。芸術も、写真集や演劇・映画・大衆演芸、さらにスポーツに囲碁将棋から各種ゲーム、ダンスまで含まれるのを知るとやはりそうかなと思えるでしょう。

利用者のニーズを考えると文学の購入が増えるのは致し方ない面もありますが、その他のジャンルの資料への目配りもしっかりしないと図書館の品位が保てないことも忘れないで選書にあたりたいものです。利用者の皆さんも、小説しか読まないという人や新聞雑誌ばかりの人がもしいたら、ぜひ目先を変えて書架を巡ってみてください。眺めているといろんな発見があって楽しいものです。ちなみに私は、0類（総記）にある『森銑三著作集』を借り出して読むのを老後の楽しみにしています。（陽）